

原爆文学研究会報

第五〇号

原爆文学研究会 二〇一六年九月

長崎大学周辺の街並みを歩く 研究スペースのある一二階の窓からは、青葉の濃い山並みと、足元の大学キャンパスのゆつたりとしたグラウンドや建物、そして山の中腹までみつしりと立ち並ぶ家々が見渡せる。家野町、石神町、本原町、上野町：目を凝らすと、浦上教会の双塔も建物の陰から覗いている。眼下に広がるのはいずれも、かつて原子爆弾によって大きな被害を受けた街々だ。しばらくは、大人しく机に座って締め切り前の原稿に取り組んでいるのだが、そのうちに眼下の街を歩いてみたくなり、気づけば、日傘と地図を片手にキャンパス周辺をうろろしている。梅雨明けの太陽が照りつける真つ昼間に戸外を怪しげにうろついているのは、私と携帯を手にポケモンの捕獲を企てる学生ぐらいのものである。

長崎大学の文教キャンパスは、原爆投下当時、三菱長崎兵器製作所大橋工場だった。守衛室の裏手の木陰にある長崎師範原爆慰霊碑、北門を出て東に伸びる被爆の痕を残す三菱長崎造船所船型試験場、三菱のロゴを象った原爆殉難者芳名碑、道路を隔てた純心中高の敷地内にある慈悲の聖母像、そして、三菱兵器と刻まれた標柱：残されたわずかな痕跡からは、原爆の被害とともに、失われた被爆前の街の姿がぼんやりと立ち上がってくるようにも感じられる。原爆投下によって失われたかつての街並みは、今では七〇年前にこの街に暮らした人々の記憶か、切り取られた写真の中にしかない。現実と重なったもう一つの景色を見ようとしているという点では、見慣れた風景の中でバーチャルなポケモンを捕まえるようにしている学生と同じことをしようとしているのかもしれない、と思う。

文教キャンパスの成り立ちをもう少し調べようと、図書館に向かい、大学史を借りた。誰も借りたことがないようで、係の方が真新しい貸出期限票を本に貼り付けてくださった。先日、広島大学の東千田キャンパスに一部の学生が戻ってきたというニュースが流れていたが、被爆した地に今もキャンパスを構える大学は珍しい。被爆によって失われたかつての街の姿、もう一つの世界を、このキャンパスを歩く学生にも伝えることができたなら、と思っている。
(四條知恵)

第五〇回 原爆文学研究会報告

二〇一六年五月一四日(土)、一五日(日)に、山口大学学生会館で、第五〇回研究会を開催しました。二〇〇一年二月の第一回例会から数えて五〇回の節目となる今回は、初日に会員である岡村幸宣氏と村上陽子氏の著書の書評会を行い、二日目に総会を行いました。

岡村氏の『〈原爆の図〉全国巡回』については東村岳史氏が報告しましたが、著者を交えた全体討論では、「当時の政治的な文脈が触れられていないが、どのようなものだったのか」「政治的な動きから始まったものだが、そこからどのようににはみ出していくのか」という作品背景、「市民による原爆の絵の表現との違いは何か」「ヨシダ・ヨシエのいう「恥じらい」をどのようにとらえるか」という表現の問題、「右派や占領する側からどのように評価されていたのか」「様々な情報が提示される総合原爆展において原爆の図はどのような意味を持っていたのか」という評価の問題などに



関して意見交換がありました。村上氏の『出来事の残響』については茶園梨加氏が報告しました。こちらも著者を交えての全体討論を行い、「社会の無意識をどうとらえるか」「中短編小説をどう読むか」という読み方、「沖繩文学」という名付けという問題、「作品の発掘」などに関して意見交換がありました。

二日目は初めて会員総会を行いました。事前に行った会員向けのアンケートの集計結果を踏まえながら、今後の会の方針について、参加者で意見交換をしました。その結果、会の基本的な方針は変えないこと、新世話を募ること、新世話人会・会報・機関誌・ホームページ等を検討すること、入会手続きは例会に参加してもらって決めてもらい、入退会情報を会報等で知らせること、などが決まりました。

一日目の様子

書評1 「岡村幸宣言『原爆の図』全国巡回」(新宿書房 2015.10)」、書評2 「村上陽子『出来事の残響』(インパクト出版会 2015.7)』印象記

齋藤 一

書評1は東村岳史氏の担当であった。東村氏の問いは約言すれば以下のようになる。(1)巡回展が「不思議な魅力」を帯びた「祝祭」的なものだったこと、そしてそれはヨシダ・ヨシエが多くのお客のなかに見出したという「恥じらい」とどう関係するのか。(2)巡回展の時期と場所、観衆の多様性による反応はどう違ったのか(広島では不評、長崎の反応は異なっていたという)。(3)この巡回展の占領下当時の運動としての意義と、観衆参加型とでもいうべきこの巡回展の今日的意義はどう考えるべきか。(4)この巡回展の社会的機能は、例えば増田肇論文がいうところの「精神安定装置」ではなかったのか。これらの問いに対して岡村氏はもちろんフロアからも様々な応答があつたが、個人的には(4)をめぐる質疑応答が、『原爆の図』を超えたより大きな問いにも触れていたと感じた。

書評2は茶園梨加氏の担当であった。茶園氏作成の作成した資料は村上氏の著作の全一二章それぞれにコメントしたものであり、それら全てを紹介することはできないので、個人的に強く心に残った点のみを取り上げる。(1)第四章「来るべき連帯に向けて——長堂栄吉「黒人街」」において、村上氏は沖繩の人々と「黒人兵」たちとの連帯が「その都度ことなるものとして出現する」と指摘しているが、それはどういうものでありうるのか、そしてその連帯の可能性が(現在進行中でもある)沖繩の複雑さとうまく関わるのかというコメントは印象に残った。また、(2)第九章「原発小説を読み直す——井上光晴「西海原子力発電所」」において、村上氏は「可能性と危険性を合わせ持つ存在」としての「偽被爆

者」を取り上げたが、このことは被曝の「当事者」とは誰かという問いにつながるものであり、熊本・大分大地震や川内・玄海原発のことを念頭に置けば、極めて切実に響くというコメントには考えさせられるものがあった。フロアからは「残響」に読者がいわば共振してしまうこと自体を問い直す必要があるという、文学研究者の立ち位置そのものに関わる質問もあり、3時間超の書評会は瞬く間に終了した。

第二期世話人会会について

六月から原爆文学研究会の企画・運営を行う「第二期世話人会」が発足しました。任期は三年です。よろしくお願いいたします。

【メンバー】

岡村幸宣、川口隆行、楠田剛士、坂口博、長野秀樹、中野和典、野坂昭雄、東村岳史、村上陽子、山本昭宏、李文茹

【仕事分担】

代表世話人 川口隆行（二〇一六―二〇一八）

事務局長 中野和典（二〇一六―二〇一八）

機関誌編集 中野和典（二五号）、山本昭宏（二六号）、楠田剛士（二七号）

会報編集 楠田剛士（二〇一六）、村上陽子（二〇一七）、東村岳史（二〇一八）

HP担当 野坂昭雄（二〇一六）、岡村幸宣（二〇一七）、李文茹（二〇一八）

彙報

第五〇回 原爆文学研究会

〇日時 二〇一六年五月一四日（土）、一五日（日）

〇会場 山口大学 大学会館 第二集会所

【一日目】

書評1 岡村幸宣『原爆の図』全国巡回』（新宿書房 二〇一五・一〇）

東村 岳史
書評2 村上陽子『出来事の残響』（インパクト出版会 二〇一五・七）
茶園 梨加

【二日目】

原爆文学研究会総会

編集後記

五月の研究会から早くも四ヶ月が経ちました。会報の発行がこの時期になつてしまったことをお詫び申し上げます。

戦後七一年目の夏は、オバマ米国大統領の広島訪問、伊方原発の再稼働、北朝鮮の核実験など大きな出来事がありました。本会としては第二期世話人会がスタートし、今後の研究会の企画や一五号の編集を進めてきました。次回の研究会は二月二四日に神戸で開催します。三つの研究報告に加えて、「原爆文学「古典」再読4」として、峠三吉『原爆詩集』を読む予定です。峠についてもこの夏、『原爆詩集』が岩波文庫から刊行されたり、日記資料が広島市に寄託・原爆資料館で保管されるというニュースがあつたりしました。

また九月一四日、本会員の道場親信氏が急逝されました。サークル文化運動や社会運動の観点からご発言いただき、本会に大いに刺激を与えてくださいました。道場氏に感謝の意を表し、氏のご冥福を心よりお祈り申し上げます。
(楠田剛士)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八二四―〇一八〇 福岡市城南区七隈八一―一九一

福岡大学人文学部 中野和典研究室内

tel:092-871-6631 (代表) / e-mail:nakanok@fukuoka-u.ac.jp

URL <http://www.genbunken.net>